

平成15年度国立感染症研究所研究課題評価報告書

1. 研究課題評価の対象

今回の研究課題評価は、機関ごとに特別な予算措置がなされた研究課題を対象に、2課題の事前評価、2課題の中間評価及び1課題の事後評価を実施した。

なお、具体的な研究課題評価の評定事項は、「国立感染症研究所所内研究評価マニュアル」に基づき、以下の事項を対象とした。

(1) 事前評価にあつては、

- ① 専門的、学術的観点からの重要性、発展性
- ② 研究の独創性、新規性、課題の実現性
- ③ 行政的観点からの関連性、重要性、緊急性

(2) 中間評価にあつては、

- ① 専門的、学術的観点からの達成度（成果）、妥当性、継続能力
- ② 行政的観点からの貢献度

(3) 事後評価にあつては、

- ① 専門的、学術的観点からの達成度（成果）、発展性
- ② 学術的・国際的・社会的意義
- ③ 行政的観点からの貢献度

2. 評価の方法

評価は国立感染症研究所所長から委嘱された10名の委員（資料1）で構成される国立感染症研究所研究評価委員会において、次により実施した。

- (1) 研究課題評価資料を各委員に事前評価課題にあつては研究計画書、中間評価課題にあつては研究中間報告書、事後評価課題にあつては研究終了報告書を配布。
- (2) 委員会を平成16年2月24日（火）に、東京都新宿区の国立感染症研究所省戸山研究庁舎において開催。
- (3) 研究課題評価の具体的な進め方は、検討の結果、研究所からの説明に対する質疑応答、全体討論、委員のみによる審議。
- (4) 各委員の評価結果を委員会当日配布した研究課題評価票に記載し、後日送付されたものを報告書としてまとめ国立感染症研究所長に提出。

3. 研究課題評価の結果

個別の研究課題に関する評価は以下のとおりである。

なお、研究課題ごとに総合評点（5＝特にすぐれている、4＝優れている、3＝良好、2＝やや劣っている、1＝劣っている）を付けた。

(1) 事前評価

① 研究事業課題

ア 重症急性呼吸器症候群（SARS）対策事業費

[特記事項]

厚生労働行政面での重要性は言うまでもない。組織、計画、目標も明確で、行政課題との連繋も確実であるが血清疫学的研究も必要と考えられる。

一方、全般にこの事業費による展開には根本的な我が国の問題が含まれている事を認識する必要がある。研究レベルではないが、明らかに我が国の感染症に対する戦略性のなさが見て取れる。研究そのものの評価ではないが、国立感染症研究所として一考を要する。

[総合評点] 4

イ ヘモフィルスインフルエンザワクチン品質確保研究費

[特記事項]

我が国の小児髄膜炎に対するヘモフィルスインフルエンザb型ワクチンの開発と安全性、有効性の評価は重要である。新規ワクチンの評価に関する、言わば国立感染症研究所の業務とも言うべき仕事で、厚生労働科学分野における重要性、行政課題との関連性も高い。この種の調査は、国立感染症研究所として重点化し、長期的に取り組むべきである。特に、研究内容にあるように、異種ワクチンと混合して使用する時の効果の発現、相互の影響など、医療に対する影響度は高い。今後の発展を期待する。

[総合評点] 4

(2) 中間評価

① 特別研究課題

ア 非ウイルス性感染病原体による疾病発症の原因と予防に関する研究

[特記事項]

含まれる個別の研究はマラリアに関するもの以外は進度が認められるが、全体として目指しているものが見えない。細菌、真菌など非ウイルス性感染病原体に関連する疾病の研究は、他にあまり見られないユニークな研究だが、あまりにも多くの病原体を扱う中に、総花的になりすぎないような注意が必要である。すなわち、各部の適当な研

究を集めただけに見える。内部事情で仕方がないのかも知れないが、終了時にはせめてもう少し統一性のある展望が示される事を期待したい。マラリアの研究も発展を望みたい。しかし、この種の特別研究を外部評価の対象とする必然性があるのだろうか、という点も機関評価の重要性に鑑み、一考されることを期待する。

[総合評点] 4

②研究事業課題

ア 薬剤耐性菌感染症情報収集と解析及び耐性菌の分子機構の解析に関する研究費

[特記事項]

厚生労働行政に対する貢献度も高く、計画も妥当であり、研究推進能力も優れている。国内外で発生する多様な耐性菌のリファレンスを作製し提供することは、国立感染症研究所の重要な業務の一つと考えられ、高く評価できることから是非とも強力、かつ、長期的に推進し、医療の第一線に確実かつ信頼できるデータベースとして還元することを望みたい。また、耐性菌の疫学・淋菌の耐性についても研究して頂きたい。

[総合評点] 4

(3) 事後評価

①特別研究課題

ア 節足動物による感染性病原体伝播に関する分子機構の解明とベクター制御のための基礎研究

[特記事項]

節足動物によるウイルス伝播機構をベクターとウイルスの両面から解析しており個々の研究の達成度については良好と思われるが、今後どのように研究全体の統一的、バランスをとって、実地に展開して行くのかについて像が見難い。もう少し、長期的展望に立脚した、具体的な strategy, vision が欲しいと考える。

[総合評点] 4

以上

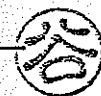
平成16年12月6日

国立感染症研究所長 殿

国立感染症研究所

研究評価委員会

委員長 谷 修



国立感染症研究所研究評価委員会 委員名簿

氏 名	所 属 ・ 職 名
◎委員長 谷 修一	国際医療福祉大学・学長
垣添 忠生	国立がんセンター・総長（泌尿器科学・悪性腫瘍学）
堺 宣道	公害等調整委員会・委員（公衆衛生学）
川名 尚	帝京平成短期大学・副学長（臨床ウイルス学）
竹内 勤	慶應義塾大学 医学部・教授（寄生虫学）
相楽 裕子	横浜市立市民病院 感染症部長（感染症学）
甲斐知恵子	東京大学 医科学研究所・教授（ウイルス学）
丹野磋喜子	地方衛生研究所全国協議会・会長（埼玉県衛生研究所・所長）
成田 昌稔	厚生労働省大臣官房厚生科学課・研究企画官
北井 暁子	国立国際医療センター・国際医療協力局長